

テレビ・ドキュメンタリーの描いた海景 ——戦争・水域・汚染

The Representations of the Sea on TV Documentaries: War, Exclusive Economic Zone, and Pollution

◎瀬尾 華子¹
Hanako SEO

¹ 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 The University of Tokyo III / GSII

要旨…本研究は、「海」という視点から、テレビ・ドキュメンタリーの特徴や変化を考察していくものである。報道ドキュメンタリー番組「NNNドキュメント」を研究対象に、少数者や取り残されていくものとしての海に暮らす人々の具体像から、テレビ・ドキュメンタリーが日本社会をいかに描いてきたのかを明らかにする。本稿では、「海」との関連で浮かび上がってきた「戦争」「経済水域」「汚染」という隣接するテーマに限定して分析した。その結果、「NNNドキュメント」に描かれていたのは、モノクロと青の海の対比によって表現される被害者たちにとっての戦争、時代や場所によって異なった意味を持つ経済水域の海の一つの構図、そして漁民が暮らし続ける海の中に目をこらすことによって浮き彫りになる戦後の日本社会の輪郭であったことが示された。

キーワード テレビ・アーカイブ、NNNドキュメント、メディア表象、戦後、環境

1. はじめに

(1) 研究背景と目的

四方をオホーツク海、太平洋、東シナ海、日本海に囲まれた島国・日本だが、17世紀から約250年間続いた鎖国政策によって「閉鎖的な封建・農耕社会」が発達してきた一面がある。開国・明治維新ののち、国際社会の中で歩み始めると、20世紀の日本は、海を通じて「孤立した島国」ではない様々な姿を見せていく。

本研究では、「海」という視点からテレビ・ドキュメンタリーの特徴や変化を考察していくものである。「海」は、本研究の分析対象である報道ドキュメンタリー番組「NNNドキュメント」のタイトルや内容を記録した資料に、その記述が多いことから発見したキーワードであり、特定の社会問題的なテーマに限定しない一つの視点としての可能性を秘めているといえるのではないだろうか。

テレビ・アーカイブ研究は、2010年にプロジェクトが開始されたNHK番組アーカイブス・学術利用トライアルや、NHKと全民放の共同事業である「放送ライブラリー事業」の一環で2013年から試験運用が開始された放送ライブラリーの大学教育への活用により、近年多くの成果をあげている。

このようなアーカイブ研究の傾向としてあげられるのは、第一に「過去の映像を優れた『記録資料』としてそれぞれの分野の研究に活用する方向」、第二に「番組から距離をとり、その番組が制作された社会的文脈に位置づけ直した上で、映像を記録する〈現実〉を批判的に検証する方向」、そして第三に「特定の制作者の営みに光を当て、制作された映像を通時的に辿り直し、再評価を試みる方向」である。しかし、伊藤守は、この分析枠組みにとらわれない「独自の領域と方法の開拓」が可能ではないか、と問いかける(伊藤守 2015: 549-50)。「海」という視点での研究は、この「独自の領域と方法の開拓」の模索に他ならない。

「海」という視点にいち早く着目しているのは、後述するように非農民社会に注目した日本中世史研究の網野義彦があげられる。また、メディア研究でいえば、日本文学における「海」の表現に関する研究(長柄裕美 2011)や、沖縄海洋博の表象に関する研究(本浜秀彦 2008)、または日本映画における「海」の研究(照沼博康・横内憲久・岡田智秀 2007)などがある。しかし、テレビ・ドキュメンタリー研究では「海」という視点からの分析はなく、日本社会が「海」との関係の中でどのような変化を遂げてきたのか、それがドキュメンタリーの中にどのように描かれてきたのかは明らかにされてこなかった。よって、

本研究ではテレビ・ドキュメンタリーの描いた「海」に注目し、「海」を参照項として戦後の日本について問い返していく。

2. 方法と対象

(1) 方法

マルクス主義歴史学の生産力の発展を軸とした唯物論的歴史観は、第二次大戦後の日本の歴史学において強い影響を及ぼしていた。網野善彦も影響を受けた一人であり、マルクス主義歴史学の影響の下で「若狭における封建革命」（網野善彦 1951）などの論文を書き著している。

しかし、網野はその後、マルクス主義歴史学とは対照的な歴史観を表明していく。日本国家を支えた「農本主義」的見方に偏っていたそれまでの歴史学を批判して海民の世界に注目し、少数者や取り残されていくものとしての海民の具体像から、天皇との結びつきを明らかにしたのである（網野善彦 1984）。

本研究が共有したいのは、この海民への視点である。つまり、少数者や取り残されていくものとしての海に暮らす人々の具体像から、テレビ・ドキュメンタリーが日本社会をいかに描いてきたのかを明らかにする。

(2) 対象

研究対象としたのは、日本テレビ系列の報道ドキュメンタリー番組「NN ドキュメント」（日曜深夜帯に放送）である。「NN ドキュメント」はローカル局 29 局が持ち回りでそれぞれの地域に密着したテーマのドキュメンタリーを制作しており、1970年の放送開始から現在までの間、日本社会の様々な姿を見つめて続けてきた。

テレビ・アーカイブ研究の現状は、NHK アーカイブスや放送ライブラリーに保存されている番組の分析が中心で、民放やローカルの番組の対象化が不十分であった（丹羽美之 2013）。そこで、情報学環丹羽美之研究室と NN ドキュメント（事務局：日本テレビ）が NN ドキュメント共同研究を 2013 年度に立ち上げ、「NN ドキュメント」のデータベースの整備と研究・教育への利用を進めている^①。

「NN ドキュメント」は、2014 年までに約 2250 本が制作された。そのうち、データベースを利用して番組の「タイトル」から「海」という単語を調べると、113 件が検索される^②。113 件のうち、NN ドキュメントの事務局に映像が保存されていて視聴可能だったのは、89 本の番組だった。今回は、その中から「海」との関連で浮かび上がってきた「戦争」「経済水域」「汚染」という主要なテーマに限定して視聴し、これらの隣接するテーマにおいて「海」がいかに描かれたのか、その特徴的な点について考察する^③。

3. 海と戦争

(1) 惨劇を映し出す海

「海」がタイトルに含まれる番組 89 本のうち、「戦争被害」がテーマとなっていた番組は 11 本あった。集団自決の島や遺骨収集、残留日本人、そして強制連行された韓国・朝鮮人、そして生き残った兵士の証言が取り上げられていた。

まず描かれたのは、沖縄戦で起きた集団自決の座間味島であった。『33 回忌の夏①青い海の惨劇～集団自決 358 人の島～』（1977 年 7 月 31 日放送、制作：日本テレビ放送網）は、戦後生まれの若い女性が自分の母や祖母を含む自決未遂者にインタビューし、集団自決がどのようなものだったのかをレポートしていく内容である。「青い海」とはもはや観光地と化した沖縄の海を指すが、自決未遂者を通して見る海には、悲惨な集団自決の惨劇が映し出されていく。

続いて、戦没者の遺骨収集の問題が取り上げられ、戦没者の遺骨が取り残された海とその関係者たちが登場する。サイパン島の「自決の崖」の案内人であるホワンさん取材した『シリーズ戦争を見つめる ホワンさんの「海ゆかば」』（1979 年 7 月 29 日放送、制作：日本テレビ放送網）や、被爆死亡者の広島湾への投棄とそれに基づいたミュージカル取材した『シリーズ軍拡の時代に…（14）オトとチコの海』（1983 年 12 月 25 日放送、制作：西日本放送）では、戦後数十年間、ずっと取り残されてきた遺骨の存在を伝えようとする人々の姿が取り上げられた。一方、北海道留萌沖で沈没した引き揚げ船の遺骨収集取材した『シリーズ軍拡の時代に…（21）海の墓標～泰東丸捜索 39 年～』（1984 年 9 月 2 日放送、制作：札幌テレビ放送）や、米軍に撃沈され海に沈んだ日本軍兵士の遺骨を収集するトラック環礁・沈没船遺骨収集団取材した『シリーズ軍拡の時代に…（22）藍の海の戦士たち～トラック島・40 年～』（1984 年 9 月 9 日放送、制作：讀賣テレビ放送）では、その遺骨の在り処を探し求める遺族の姿が描かれた。

海の向こうに取り残されたのは、遺骨だけではなかった。『シリーズ 36 年目の夏に…（3）母の唄は海峡の果てに～北方領

土未帰還女性の36年〜』（1981年8月16日放送、制作：札幌テレビ放送）では、終戦後に択捉島に取り残された娘に会うことを待ちわびる母親の唄が、海峡を渡ってサハリンに住む娘の元に届けられるという内容で、その後の『母たちの海峡〜サハリン残留日本人・エミコの春〜』（1991年8月25日放送、制作：札幌テレビ放送）では、娘がやっと日本に一時帰国する様子が伝えられた。サハリンで母となった娘は、自分の苦難の人生を振り返りつつ、日本の母親に会うために海峡を渡っていく。

そして、90年代には従軍慰安婦や強制労働をさせられた韓国・朝鮮人にとっての海が描かれる。『海鳴りのうた〜朝鮮半島からきた炭坑夫たち〜』（1991年3月17日放送、制作：山口放送）では、第二次世界大戦末期に朝鮮半島から山口県宇部市の長生炭鉱に強制連行された炭坑夫たちの水没事故死について調査した。韓国籍の僧侶がもっていた名簿を手掛かりに韓国の遺族を訪ねると、遺族は戦後50年経ってもなお抱き続ける日本への遺恨の念を語った。朝鮮人強制労働者の死については、『シリーズ49年目の夏に（1）恨（ハン）の海〜裁かれる浮島丸事件・その真実は…〜』（1994年7月24日）でも取り上げられた。朝鮮人を釜山へと送る輸送船・浮島丸の謎の爆発事故について、遺族たちが日本政府の責任を訴えていく様子が伝えられた。そして、『怨みの海峡〜元従軍慰安婦たちの50年〜』（1993年5月23日）は、一昨年前に明るみでた従軍慰安婦問題について、元従軍慰安婦の女性たちの山口地裁への提訴を追った。女性たちは下関港の海を眺めながら当時の記憶に涙を流す一方、日本政府は誠意ある対応を示さず、従軍慰安婦問題の根深さが描かれた。

最後に、『海底の骸〜沖縄水深45Mからの伝言〜』（2001年7月1日放送、制作：日本テレビ放送網）は、太平洋戦争で沖縄近海に沈没したアメリカの軍艦の発見をきっかけに、その関係者を取材した。軍艦の乗組員であったアメリカ人男性が、海底の軍艦の映像を見ながら、カミカゼの攻撃にあった当時の状況、そして戦死者たちに思いを馳せる姿が描かれた。

このように「海と戦争」に関する番組には、戦争被害者それぞれの眼差しを通して、彼らの経験した戦時中の惨劇が海の中に映し出されていた。

(2)モノクロと言

以上の「海と戦争」の番組で特徴的に描かれたのは、「過去」の象徴としてのモノクロの海と、「現在」の象徴としての美しく輝く青い海の対比であった。この海の対比により、モノクロであるはずの戦時中の光景がむしろ鮮明に表現され、また美しく輝くはずの現在がむしろ不鮮明なものとして描かれていく。

例えば『33 回忌の夏①青い海の惨劇〜集団自決 358 人の島〜』では、座間味島の美しい海辺で遊ぶ観光客の映像にのせて、レポーターが「しかし、ほとんどの観光客は、この島が去る第二次大戦において米軍の日本上陸第一歩の土地であるとは気にも留めないようです」と語ったあと、激しい海上戦のモノクロ映像が映し出されていく。このモノクロ映像が、戦争の厳しさ、悲惨さを見るものに呼び起こし、陰鬱な感情を抱かせていく。

『怨みの海峡〜元従軍慰安婦たちの50年〜』でも、同様の対比が描かれる。先に述べた元従軍慰安婦の女性が下関港を訪れる場面では、女性たちを日本に運んだ関釜連絡船のモノクロ画像のあとに、女性たちがいま見つけている美しい海の輝きが映し出されていく。そして、一人の女性は涙ながらに「この海さえなければ…」とつぶやく。過去の海と、現在の海が対比される中で、青く輝いているかのように見える「今」の儚さ、不確かさが描き出されるのだ。

カラー技術は早くから模索されているが、日本で初めての本格的なカラーの長編劇映画は、1951年の『カルメン故郷に帰る』（松竹、木下恵介監督）であるとされている。その後、1954〜1958年の記録映画『佐久間ダム』シリーズ（岩波映画）もカラーで制作され、1960年代から70年代にはカラー映画やカラーテレビも普及していくようになる。当然ながらモノクロの戦時中の海の映像だが、テレビ・ドキュメンタリーの中ではそのことを逆にとり、被害者たちにとって戦争とはどのようなものであるのかが巧みに表現されていた。

4. 海と経済水域

(1) 翻弄される漁民たち

「海」がタイトルに含まれる番組89本のうち、「経済水域」に関連する番組は7本あった。200海里時代を迎えた北洋漁業、密漁や密輸の横行するカニビジネス、そして長崎県対馬沖の国境の海の漁民の姿が取り上げられた。

まず、1977年にアメリカやソ連のよる漁業海域200海里規制が施行されたことによる日本漁業の変化が描かれた。『新・海シリーズ②ソーラン節は消えた』（1977年12月11日放送、制作：日本テレビ放送網）では、200海里規制のためにニシン漁全面禁止となり、北洋の漁場からUターンしてきた北海道古平町の元ニシン漁民と、その沿岸漁民との対立を取材した。『200海里すり身戦争〜報告・ベーリング海'86〜』（1986年10月5日放送、制作：札幌テレビ放送）は、200海里施行から約10年後

の北洋漁業を取り上げ、蒲鉾の原料となるスケトウダラの漁や水産加工業が縮小されていることを伝えた。いずれの番組も、200海里時代という荒波に翻弄される北洋漁業の漁民の様子が描かれていた。

90年代になると、札幌テレビ放送はカニの密漁が行われる海に注目した。『禁断の海～カニのまち 根室の苦悩～』（1995年12月10日放送、制作：札幌テレビ放送）は、200海里施行後、ロシアが実効支配する北方四島近海で特攻船でのカニの密漁や密輸入を行う根室の漁民の姿、そしてカニを密輸するロシア人に実質的に支えられている根室の地元経済について取材した。その後も、『偽りの海 カニビジネスの闇』（2005年2月27日放送、制作：札幌テレビ放送）や、『食い尽くされた海 カニ密輸ビジネスの果てに』（2008年10月26日、制作：札幌テレビ放送）では、日本の漁民の協力の元で行われてきたロシアのカニビジネスの違法操業や密輸の闇、そして密漁と奪い合いがもたらしたカニの枯渇を追っている。北方領土の問題に関わるカニビジネスにおいてあの手この手を使って利益を上げようとする日本、ロシア双方の漁民たちの姿が描かれていた。

90年代後半からは、長崎県対馬沖の国境の海に関する番組が制作された。『コテグリの海～日韓の漁民たちは今～』（1998年11月1日放送、制作：福岡放送）は、韓国と海を挟んで50キロの国境の港町・比田勝の漁民たちが、領海のすぐ近くまで押し寄せる韓国漁船コテグリに頭を痛める様子を伝えた。しかし、コテグリの乗組員は韓国の漁民の中でも貧しく、生活のためにコテグリでの漁を続けざるを得ない。乱獲による資源の枯渇の恐れもあり、いかに近隣の国で資源を分かち合っていくかを問いかける内容となっていた。『不審船を追え！国境の海を守る男たち』（2007年5月27日、制作：日本テレビ放送網）は、対馬海峡の違法な韓国漁船監視する海上保安官たちに注目した。この番組は、漁民を監視する新人海上保安官の視点から、国境の海の緊迫した取り締まりの現場を伝えた。

以上、「海と経済水域」に関する番組で描かれたのは、200海里という時代に翻弄され、漁業の方法を模索する日本や隣国の漁民たちの姿であった。

(2) 隔たりと侵入

「海と経済水域」で特徴的に描かれたのは、「隔たり」として突如あらわれた海、そして次第に「侵入」し、「侵入」されていく海を表現する一つの構図であった。

『200海里すり身戦争～報告・ベーリング海'86～』には、アメリカの沿岸警備隊が条約に違反していないか日本の漁船を抜き打ちで臨検する場面がある。カメラは臨検に向かうアメリカのボートの側から、遠くに見える日本の漁船の姿を映像に収めていく。アメリカのボートと日本の船の間にはもちろん北洋の海がみえるが、その海は日本の漁船が超えることのできない200海里の「隔たり」として存在していた。

一方、同じような構図の場面がある『禁断の海～カニのまち 根室の苦悩～』では、その「隔たり」を超えて、北方四島近海に「侵入」していく日本の特攻船の姿を、ロシアの国境警備隊が撮影していた。「侵入」した特攻船はロシアから銃弾を打ち込まれ、海に沈んでいく。

逆に、『コテグリの海～日韓の漁民たちは今～』では、カメラは日本側の水産庁の監視船に乗り込み、韓国から日本の対馬沖の領海すれすれまで密漁してきたコテグリ船の姿を映し出していく。その間に見えるのはもはや「隔たり」としての海ではなく、他の国の漁民に「侵入」されていく日本の海であった。

このように「海と経済水域」に関する番組からは、たとえ同じ構図の海の映像であっても、時代や場所によって海が日本の漁民にとっていかなる存在であるかが異なって表現されていたことがわかる。

5. 海と汚染

(1) なお続く海の暮らし

「海」がタイトルに含まれる番組89本のうち、「汚染」に関連する番組は14本あった。これらの番組では、不知火海の水銀や青函トンネル工事の排水、養殖魚への薬物使用、船舶燃料の流出、原発の温排水や放射能、ダムから流れ込むヘドロ、そして富栄養化による赤潮など、様々な海の汚染が取り上げられた。

工場排水による水銀中毒が原因で水俣病が広がった不知火海について取り上げた『この10年①不知火海を見ましたか』（1979年1月7日放送、制作：日本テレビ放送網）は、「東京・水俣病を告発する会」の代表世話人として全国行脚した砂田明氏の水俣での暮らしを訪ね、風化する水俣病患者やその家族の実態を伝えた。その後の『苦海に生きて～水俣病三次訴訟判決を前に～』（1987年3月22日、制作：熊本県民テレビ）では、水俣病の認定訴訟の状況を明らかにする一方、裁判に出廷した原告女性が水俣市近くの漁港で平穏に暮らす様子を映し出していく。

養殖による汚染の問題に言及した『驕（おご）りの海から—ハマチ漁協倒産—』（1983年9月18日放送、制作：南海放送）は、宇和海のハマチ養殖漁協の巨額の負債を抱えた倒産事情を追跡する中で、餌の過剰投与や過密養殖による周辺の富栄養化、葉害による魚の奇形の可能性を伝えた。そして、『裏切りの海 養殖フグとホルマリン』（2003年4月27日放送、制作：熊本県民テレビ）では、長崎県鷹島のトラフグ養殖においてエラ虫駆除に使われる劇薬・ホルマリンの海洋投棄の問題を取り上げた。これらの番組の中では、海を汚染することになってからも養殖業で生活していく漁民たちの姿が描かれていた。

原発による温排水汚染について、『スナメリの海 ～迷走する山口・上関原発～』（2000年4月23日放送、制作：山口放送）では、山口県上関町四代の上関原発建設予定地近くの海に現れた「スナメリ」という世界一小さなクジラとともに伝えた。所有する共有地を勝手に中国電力に譲り渡されてしまった女性は、訴訟を起こして原発建設に反対しながら、その海が望める山の上の土地を財産として、穏やかな暮らしを続けていた。また、『3・11 大震災 シリーズ (33) 海は死んだのか～福島漁師 親と子の選択～』（2012年6月17日放送、制作：福島中央テレビ）と、その続編の『3・11 大震災 シリーズ (48) 海は死んだのか2～汚染水と福島の漁師たち～』（2013年11月24日放送、制作：福島中央テレビ）は、福島第一原発事故の放射能汚染を懸念する福島県いわき市沖の漁師たち取材した。海上のがれきの処理やモニタリング調査をして暮らす男性は、本格的な漁を自粛しなければならない状況が続く中で、船のエンジンを新調して福島の漁業に望みを託していた。

以上では、不知火海の水銀汚染や、養殖魚への薬物使用による汚染、そして原発による温排水汚染や放射能汚染を取り上げた番組に言及した。「海と汚染」については、汚染された海と知った上で、なおその海を離れない汚染の被害者、そして加害者でもあった漁民たちの暮らしが描かれていた。

(2) 水中からみた日本社会

「海と汚染」の番組で特徴的だったのは、水中撮影映像の多用であった。水中撮影の映像の使用は、1980年放送の海底40メートルに根をおろす木々を撮影した『海底に一万年前の埋没林を見た』（1980年10月12日放送、制作：北日本放送）にまず見られる。この時、撮影機材自体も、わざわざ「水中ビデオカメラ」とテロップ表示されながら画面に映し出されていて、番組としては珍しい撮影技術だったことが窺える。

「海と汚染」に関する番組では、水中撮影によって汚染された海の実態が映像化されていた。例えば、『苦海からの叫び～水俣病30年～』（1986年7月20日放送、制作：熊本県民テレビ）では、水俣湾の水銀を多量に含んだヘドロが海中に舞い上がる様子、そして水銀に汚染された魚が湾内から出ないように張り巡らされた仕切網の様子が撮影されていた。しかし、この仕切網は至るところで破れていて、もはや意味をなしていないことが映像から見て取れる。

そして、『列島検証 破壊される海』（1996年7月14日放送、制作：日本テレビ放送網、札幌テレビ放送、テレビ岩手、北日本放送、西日本放送、熊本県民テレビ）や、その続編の『『NNNドキュメント40年企画 列島検証 破壊される海2010』（2010年1月31日放送、制作：日本テレビ放送網、札幌テレビ放送、山梨放送、北日本放送、熊本県民テレビ）では、有明海や瀬戸内海、富山湾、北海道近海、東京湾、沖縄石垣島沖など各地で水中撮影を行い、日本沿岸で深刻化する様々な海洋汚染や環境破壊の実態を伝えた。そして、海の異変とつながる山の環境の重要性を指摘した。

人々が暮らし続ける海。その海の中に目をこらすと、日本社会がほとんど無自覚に排出し、垂れ流してきた汚染源が海底に分厚く堆積していた。その汚染された海こそ、歪んだ戦後日本社会の輪郭を浮き彫りにした。

6. おわりに——戦後の日本の「歪み」

「海」に関連して3つの隣接するテーマに限定し、それぞれの特徴を考察した中でわかったのは、以下である。

第一に、「海」がタイトルに含まれる番組89本のうち、「戦争被害」がテーマとなっていた番組では、戦争被害者それぞれの眼差しを通して、彼らの経験した戦時中の惨劇が海の中に映し出されていた。戦時中のモノクロの海と現在の青い海が対比されることにより、被害者たちにとって戦争とはどのようなものであるのかが巧みに表現されていた。

第二に、「経済水域」に関連する番組には、200海里という時代に翻弄され、漁業の方法を模索する日本や隣国の漁民たちの姿が描かれていた。たとえ同じ構図の海の映像であっても、時代や場所によって海が日本の漁民にとっていかなる存在であるかが異なって表現されていた。

第三に、「海と汚染」に関連する番組には、汚染された海と知った上で、なおその海を離れない汚染の被害者、そして加害者でもあった漁民たちの暮らしが描かれていた。漁民の暮らし続ける海の中に目をこらすと、日本社会がほとんど無自覚に排出し、垂れ流してきた汚染源が海底に分厚く堆積していた。その汚染された海こそ、歪んだ戦後日本社会の輪郭を浮き彫りに

していた。

もちろん、今回は「海」に隣接するテーマを恣意的に選択したため、未検証の部分が残っている。例えば、2010年代以降に顕著に現れる「災害」というテーマも検証すべき重要な事柄である。この点は今後の研究課題としたい。

補注

- (1) 本研究は、科研費基盤(B)「テレビアーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容」(研究課題番号26285106、代表：丹羽美之)の成果の一部である。
- (2) NNドキュメント共同研究のデータベースを利用して、番組の概要が記載された「内容」から「海」という単語を調べた場合は、264件が検索される。つまり、「タイトル」検索の113件は、あくまでも「タイトル」のみが検索対象となっているため、「海」に関連する全ての番組が網羅されている訳ではない。しかし、「タイトル」に「海」が含まれる場合、番組の中に「海」が重要視されて描かれていると考えられるため、ここでは「タイトル」検索の113件のうち、視聴可能な番組を研究対象として採用した。
- (3) その他の「海」に隣接するテーマとしては、例えば「事故」「災害」「障害」「軍事」などが挙げられる。

参考文献

- 網野善彦(1951)「若狭における封建革命」『歴史評論』5(1) 1-10
- 網野善彦(1984)『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店
- 伊藤守(2015)「テレビ番組アーカイブを活用した映像研究の可能性——分析方法・手法の再検討に向けて」『社会学評論』65(4) 541-56
- 本浜秀彦(2008)「国家イベントにおける『海』の表象と視覚の政治学——沖縄海洋博をめぐる映像とミュージアムの中の『記憶』と『忘却』」『沖縄キリスト教大学院大学論集』(5) 1-13
- 長柄裕美(2011)「ヴァージニア・ウルフと尾崎翠——日英二人の女性モダニストにみる『海』と表現をめぐって」『ヴァージニア・ウルフ研究』(28) 21-38
- 丹羽美之(2013)「民放もアーカイブの公開・活用を！」『月刊民放』43(11) 24-8
- 照沼博康・横内憲久・岡田智秀(2007)「日本映画にみる海の風景の意味と演出方法に関する研究」『景観・デザイン研究講演集 No.3』
- 吉原順平(2011)『日本短編映像史——文化映画・教育映画・産業映画』岩波書店